

豊橋市指定民俗文化財

飽海人形浄瑠璃芝居

第 23 回

吉田文楽保存会

定期公演

十月二十七日(日)

開演 午後二時 (開場午後一時)

プラット

(穂の国とよはし芸術劇場)

入場無料



外題

三番叟



増補・生写朝顔話

宿屋の段

大井川の段

傾城阿波鳴門

巡礼歌の段

会員募集中

吉田文楽保存会 第23回定期公演

三番叟

能楽の「翁」を基に文楽では「寿式三番叟」として演じられているが、吉田文楽ではその中の「二人三番叟」の部分で一人だけで演じるため、義太夫・三味線はそのまま吉田文楽の演出で舞います。

この「三番叟」は正月・劇場の開場など祝賀行事の最初の出し物として演じられており、五穀豊穰・子孫繁栄を願って、田植えや塩を撒くしぐさなどを含め、にぎやかに舞います。

生写朝顔話

会いたい・・・切なる願いも空しく、近づいては離れ、すれ違い、一緒になれない男女の物語。

武家の娘深雪は、宮城阿曾次郎と恋に落ち、扇に「露のひぬ間の朝顔を照らす日影のつれなきに、哀れひと村雨のはらはらと降りかし」の歌したためて渡します。これが展開のカギとなる「朝顔の歌」となります。

しかし二人ともに急用が出来、再会を約して別れ、その後「明石船別れの段」で二人は大きく引き離されます。その後阿曾次郎は伯父の家督を継いで、駒澤次郎左衛門と改名、深雪との縁談が進みましたが、改名を知らない深雪は結婚を拒み家出、阿曾次郎が鎌倉へ向かったと知り、後を追いますが、苦勞と悲しみで失明、島田の宿で朝顔の歌を聞かせていました。

「宿屋の段」(眼の見えない朝顔、実は深雪の琴を弾くところが見所)

その深雪を阿曾次郎は鎌倉の帰りに島田の宿の宿屋で知ります。深雪は朝顔の歌を琴を弾きながら歌い、その後恋の始まりから流浪、失明までを語ります。阿曾次郎は同行者もあり、何も明かせず、朝顔の扇・金・葉を残して出立つ、気づいた深雪は雨の中を大井川へと急ぎます。

「大井川の段」(川越人足とのやり取りと深雪の悲しみが見所)

大井川では阿曾次郎と岩代は渡りましたが、川止となり深雪は追いかけられずに恋人に会えない不運を嘆きます。

傾城阿波の鳴門

阿波の徳島藩が大切にしていた「名刀」が、お家騒動の中、何者かによって盗まれてしまい、藩士である阿波の十郎兵衛と妻お弓は、家老の命により三歳の娘を母に預けて、刀を取り戻すために盗賊になりすまし、大阪に日々を送っています。

「巡礼歌の段」

そんなある日、手紙が届き、そこには捜査の手が十郎兵衛に迫っているとの知らせでした。お弓は神仏に手を合わせ夫の無事を祈っていると、可愛い巡礼が「巡礼にご報謝・・・」と現れます。

国を尋ねると阿波の徳島であり、父母に会うために巡礼していると云います。

親の名は・・・に対して、「ととさんの名は阿波の十郎兵衛、かかさんの名はお弓と申します」と聞き、我が子であると判りますが、今の状態では名乗れないとしながらも、親子の情愛を現す、一連の見せ場となります。

やむおえず、掃すものの遠ざかる巡礼の歌にお弓は我が子の後を追って行きます。